

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 武田俊輔

本論文は、近世以来の歴史をもつ滋賀県長浜市の都市祭礼を対象に、商工業者の「家」を中心に構成された「町内」の社会構造とネットワークを、著者自身の長年にわたる参与観察に基づいて描き出している。

第1・2章では、典型的な伝統消費型都市である長浜市の「町内」である「山組」という地縁組織をとりあげるにあたり、都市を聚落的家連合として分析した有賀喜左衛門と中野卓の家社会論、有末賢と松平誠の都市民俗・都市祭礼の都市社会学的研究を再検討している。特に社会変動への対応をめぐる葛藤・対立、妥協・決定のプロセスに注目し、世代を越えて継承される「家連合」における負担と名誉の配分を分析する必要性を説得的に論じている。第3章では、地域資源管理研究やコモンズ論を批判的に検討しつつ、都市祭礼をコモンズとみなすアプローチの有効性を明らかにしている。

第4章では、町内の「家」同士や世代間関係など内部構造が分析され、「町内」で発生するコンフリクトが、成員に興味を配分し、名誉や威信を挽回し合う形で、祭礼のルールと知識が伝承されるしくみが明らかとなる。第5章では、4日間の裸参りの参与観察に基づき、都市祭礼の興趣が複数の町内の対抗関係を通して創出されるメカニズムが描き出される。第6章では、祭礼のシャギリ（囃子）の担い手を確保すべく、山組同士が協力する中で、山組外の参加者にも開かれるという組織再編が生じることが明らかとなる。第7章では、若衆が山組内外のネットワークを駆使しながら祭礼費用を獲得することが、威信の誇示となるという機能が分析され、第8章では、各山組が曳山（山車）の資源管理のために、外部のアクターとの間で社会関係を創り上げるプロセスが描かれる。

さらに第9章では、戦前・戦後の社会変動を背景に、山組連合が公共的公益を提供して祭礼をどのように継承してきたかが歴史的に分析され、第10章では、本論文の都市社会学、祭礼研究、コモンズ論としての意義が明らかとなる。それは、聚落的家連合としての「町内」が、公共的公益と引き換えに行政的な枠組みや地域経済団体、ボランティアなど外部のアクターとの関係性を活用して資源を調達し、祭礼をめぐる諸資源を管理し存続させていく仕組みの解明である。とりわけ「町内」が、町内にとどまらない社会的ネットワークと公共性の重層として成立する様相が説得的に描き出されている。

審査の過程では、本論文が、都市祭礼のフィールドワーク研究としても、地方都市における家連合の展開をたどる歴史研究としても、コモンズ論を都市祭礼に適用する理論研究としても、高い水準にあることが確認された。各章の理論枠組みをより洗練させた形で統合することが今後の課題になるとはいえ、著者の長年にわたる参与観察は、本論文に比類のない記述の厚みを与えており、都市社会学のフィールドワーク研究として金字塔となることに疑いはない。

よって当審査会は、本論文が博士（社会学）の学位授与に値するという結論に達した。